

## 荒岱介

### 『破天荒伝』

(一〇〇一年二月 太田出版)

## 明大闘争と二・一協定の内幕

三派全学連の初代委員長は、私もよく知っている明治大学の斎藤克彦だった。

当時の明大は中大とともに関東における社学同の拠点校で、折から学費闘争が勃発していた。そのままで明大闘争は六五年の慶大費闘争、六五年～六年の早大闘争につぐ大闘争になるはずだった。ブントの古株の活動家に言わせれば、斎藤克彦が全学連委員長になったご祝儀に学費闘争を盛り上げようということになつたらしい。だがこの盛り上げ方がどうにも怪しかったのである。

六年の秋、明大でも早大闘争のときと同じく、大衆団交や学生集会が連日開かれていた。三派全学連の結成を控えた闘争ということで、各派からの支援も多かった。早大闘争の熱気も冷めない時期で、明大には基盤のない中核派の幹部も学生服を着て参加していたくらいだから、社会的な注目も浴びていたといえるかもしれない。こうして盛り上がった明大闘争に対し、明大ブントの指導部はひそかに收拾策を画していたのである。体育会系の学生に殴り込みをさせたり、大衆団交を長びかせたりという演出も、じつは明大ブントの指導部の手の内にあつたと聞くと、私は憤慨やるかなない。

明大費闘争は膠着したまま、一月二十四日に和泉校舎、二月一日には駿河台の本校でストライキに入った。このとき、のちに赤軍派としてアラブに飛び重信房子らも参加して、社学同は明大の二部自治会（学苑会）中の文学部に新執行部をつくっている。運動の高揚とともに組織の拡充がなされていったわけである。年も押せまつた二月一七～九日に、いよいよ全学連の再建大会となつた。そして、年が明けた二月三〇日に、明大記念館で社学同がゲバルトを振るった仕返しに、体育会系の学生やガードマンが明大の活動家を襲撃するという事件が起きた。その襲撃事件のほとぼりがさめないうちに事態は急転していったのだ。

二月三日に、明大学生会（自治会）中執委員長の大内義男と武田明治大学総長とのあいだで、いわゆる「二・二協定」が結ばれたのだ。ようするに闘争を收拾するためのボス交である。

その挙げく、第二次ブントと斎藤委員長は、明治大学の学生はもとより全学連運動を裏切ったとして、中核派や社青同解放派から痛烈な批判を受けた。社学同の活動家たちは各大学で殴る蹴るの責めを受け、ブントは大混乱になったのだ。

私はこの二・二協定が決定されていくプロセスで、一月小川町の中大学館で行われた政治局会議に、決定をくづがえさせようという堀見孝也にフレッシャー部隊としてかり出された日のことを今でも思

い出す。

マル戦派の水沢史郎や関西派の堀見孝也が「裏切りだ」と反対するのに対し、松本礼二や斎藤克彦は「明大自治会権力の維持のために妥結はやむをえない」と論陣をはつていた。私たち学生はその会議の回りを、立ち上がって取り組んでいた。

本来からいえば最高指導部の会議を学生が傍聴したり、ヤジったりすること 자체が規律違反である。しかし私たち大衆団交のつもりだったから、松本礼二や斎藤を「日和見主義だ」「学生大衆に対する裏切りだ」とののしった。会議の出席者も規律違反だとは誰も言わなかつた。

そうののしりながら私は、この組織は何とルーズな、まるでデーターメン組織運営を行つているところのかと絶望したものだ。

斎藤克彦は「このままでは明大当局の『テルミドール反動に抗し得ない』と、明大独自の利害をあくまで主張した。「革命のためには個別明治の利害を離れるべきだ」と水沢史郎は熱弁をふるつた。

私はその通りだと思った。

大学自治会を持つということは、ある種の利権を共有することを意味する。それは絶対に守るのだとながら、ブルジョアジーのやつていることは一から百まで利権のためだから駄目だと、学内権力保持派はまくしてしているのだ。

自分達こそ自民党と同じじゃないか、まだ結集したばかりの学生に憧れ、レーニン主義党どもは、その時の会議では、当局との取引は厳しく批判されたが、学内を基盤とする斎藤克彦は、それと関係なく当局との交渉を進めてもいたのだ。

こんなのは党ではない。私が第二次ブントに絶望したのはこの時の政治局会議の在り方や、討論の内容をかい間見たのが最初である。学生であったからこそ私は強い党運営に憧れ、レーニン主義党という家父長的な権力にも憧れていくことになった。第二次ブント政治局は、私の親父のように情無い存在に見えたのだ。

そもそも三派全学連の結成大会にしてからが、大変な船出があつた。それは明大記念館で行われたが、ブントの指導部としてはお茶の水界隈を拠点にしている関係で、三派全学連を何としても成功させる必要があった。中大でも学生会館の管理運営権をめぐって闘争が始まつたし、東京医科歯科大学でもインターネット制度をめぐってストライキ闘争に入つた。いずれもブントの拠点校である。その結成大会で既に三派全学連は社青同解放派とブントなどの間で殴り合いになつてゐる。人事をめぐる確執があつたのだ。

そしてブントは合同した指導部が分裂していた。そのプロセスでのブント指導部による明大闘争の收拾策は、まったくナンセンスだったとしか言いようがない。まだ学生大衆には戦闘的エネルギーが大いに残っていたのに、党派の指導部が裏取りで統制してしまつたのだから。策士策に溺れるのとえではないが、のちに中大闘争が学費値上げ白紙撤回を勝ちとり、大衆運動の可能性を全国の学生に示す

※「フランス革命期恐怖政治を施していたロベスピエールがクーデターで倒され、ジロンド党政権に変わつた事件。

伝えたのとは、明大費闘争は一八〇度ちがう結果となつたのである。

二月一八日の全学連中央執行委員会で斎藤克彦委員長は罷免された。委員長には中核派の秋山勝行、書記長には社青同解放派の高橋幸吉が就任した。

私は早稲田のマル戦派の活動家たちと理論作業を進め、社学同早大支部の機関誌『若きボリシエヴィキ』を発行しようとした。ブント再建のときに経験した経済学の弱さを払拭したかったのであるが、同時に二・二協定の総括も私の問題意識に強くのぼつていてるのである。